

## 教室で評論文を読む

### 〈意義〉



—『高等学校国語総合』『高等学校現代文』  
改訂版を素材にして

岩崎昇一

### 身近な問題発見から、普遍的テーマへ

活字離れが著しいなかにあつて、物語や小説ならまだしも評論文ともなると、生徒が自主的に書店で買って読むのは稀だろう。あるいは、受験対策として新聞の社説ぐらいは読んでいるかも知れない。いずれにせよ、生徒にとって評論文は、学校の国語の授業で（やむを得ず）読まされるものである。

だからこそ評論文の扱う内容や対象は厳選される必要がある。生徒の身近な話題から入って普遍的なテーマへと至る深みのあるものが望ましい。一体なんのために評論文を読まされるのか、その意図が見えないと生徒が、評論世界に入つてこれなくなる可能性もある。まず身近に起きている問題に気づかせるところから評論読解は始まるが、そのためには事前に調べ学習を導入するなど、授業展開に工夫が求められる。

### 常識の裏側へ——批評精神の育成

多様な価値観が錯綜し、将来像が掴みにくい現代社会を分析してみせてくれる評論文は、われわれに物の見方や生きる

指針を示唆してくれる。筆者の、社会に切り込む視点に導かれて、広く〈批評精神〉を養成するところに評論文授業の目的の一つがあるが、同時に〈批評精神〉は、自分自身にも向き合い、自己の言動を自覚的に考えていく姿勢（倫理）を育てるだろう。また評論文を読むことで、自分の考えや意見が喚起される。だが、単なる好悪などの〈感想〉をこえて説得力のある反論（あるいは賛成論）をするためには、常識を覆す問題意識とそれなりの説得力のある論旨が要求される。

今日、新聞やテレビ、インターネットの普及が、多くの情報をもたらしてくれているが、その一方で、できあいの知識や通念を鵜呑みにしたコメントや〈常識〉が流布していることも否定できない。安易な解釈や通念を打ち破つて、リアルな現実認識に至るためには、体験に根ざした持続する思考と、鋭利な批評精神に裏打ちされた知識や論理が求められる。それらの能力を育成するのが評論文の授業である。

### 意見交換の素材——賛否を問う、小論文問題への展開

実際の授業展開でも、筆者の意見や考え方に対するディベートの時間を設定すると議論が白熱することがある。特に文化やマスコミ報道など生徒に関心のあるテーマが素材となるとそうである。生徒も今日的な話題に決して無関心ではないことが明らかになる。テーマに対する生徒の思いや考えを引き出す糸口のひとつが評論文の授業である。評論教材を使って、教室で意見を交わし合うことで生徒の社会への関心や理解はいつそう深まる。

その意味で、評論文の授業は国語表現や小論文対策と密接に対応させて見ることによって新しい広がりを持つだろう。すでに

三省堂版『高等学校現代文 改訂版』(と『新編現代文 改訂版』)では、推薦入試等に対応すべく(批評のまなざし)と題して、小論文課題を設定し評論文の新しい展開を提案している。教室におけるディベートや小論文演習では、あえて反対(あるいは賛成)の立場で論陣を張らせて論戦を闘わせるなどして、評論文の読解力を向上させるのも興味深い試みである。

### 的確な読み取り ― 訓練の場

多様な展開を可能にするためにも、高校の評論教材の授業では、テキストの正確な読解と筆者の意見(考え)の読み取りが基本に置かれる。読み手の思い込みや勝手な解釈を排して、書かれている内容を文脈において的確に理解する訓練が評論文の授業では大切である。

例えば『水の東西』(山崎正和)はいささか古風な二項対立による比較文化論ながら、評論文入門に適している。全体の論理構成や形式段落を整理すると共に、対立する語句の意味も的確に理解させることで評論文の基本的構造を学習させた。さらに指示語の読解や「鹿おどし」「噴水」などの例示の意味理解を通して、筆者の見解をきめ細かく学習できるようにしている。その意味で、この評論文の読解作業は、日本語による論理的文章の読みの訓練の場になるだろう。

### 評論教材を横断的に読む ― 視野の広がり

ひとくちに評論教材といっても、扱われている主題も視点もさまざまである。しかし、それでも時代の要請に応えるようにして編集者たちが選択した評論教材や、その配列には偶然とばかりはいえない、ある共通項があるように思える。

例えば、『高等学校国語総合 改訂版』では、評論教材の充実をひとつの理念として編集されたが、評論(二)には『情報流』(西垣通)、『命はだれのものなのか』(柳澤桂子)、『地球の有限性と人間―人口問題の視点より』(竹内啓)の三本の新しい評論文が並んでいる。『情報流』は情報学の視点から「近代的個人の絶対視」を批判的に論じた評論だが、その基底にある考えは「命あるものつながりを新たな知見から説き明かすのが、情報学の役割」であると説く。それに呼応するように『命はだれのものなのか』では、まさに〈命〉の問題について、自己体験に基づいて真っ向から取り組み「一人の人の命は多くの人々の心の中に分配されて存在している。分配された命は分配された人のものである」と述べている。さらに『地球の有限性と人間』では、「自然との緊張関係の中で最もたいせつなことは人間が協力し協働することである。人間相互の対立と紛争は事態を悪化させるだけである」と論述している。このように三者の評論文は、現代社会の諸相をそれぞれ個別のテーマで論じているものでありながら、その基調に人間の〈命〉をみつめ共に生きる姿勢を読み取ることができるのである。

教科書はすぐれた評論文のアンソロジーでもある。教材ごとに単独で読解してもよいが一冊の書物として横断的に読むと、視野が広がるとともに新たな発見と読みの深まりがもたれられるにちがいない。

**いわさき しょういち** 高校の国語の教師となって二十九年。ま

た国語教科書編集にたずさわって十数年になる。現在は、東京都立国際高校で、国語とともに小論文・受験指導にあたる。